

真宗における死生観の検討

河 村 諒

一 はじめに

死別に伴う在宅高齢者に対するスピリチュアルケアの重要性が示されている。⁽¹⁾ その中で、信楽峻磨が、「親鸞が臨終の善悪の沙汰を否定して、ひとえに平生におけるまことの宗教的な生をうるといふ仏道、日常における死に対する自立、まことの人生の確立を主張していることの意味は重要である。」と述べている視点は、⁽²⁾ 真宗の視点からスピリチュアルケアを検討することが有意義であることを示していると考えられる。そこで、在宅高齢者の死生観に沿ったスピリチュアルケアのあり方を検討するため、六十歳以上の在宅高齢者十名を対象に、半構造化面接を行い、死別に伴う死生観を尋ねた。結果、いくつかの死生観が示されたが、本稿では親鸞の自然法爾の思想から、「死をありのままに受容する」という死生観に着目した。

自然法爾の思想を伝える消息である『末灯鈔』第五通では、

自然法爾は、行者の善し悪しといったはからいを離れ、如来の本願に帰する、という思想であることが示されている。この自然法爾の思想を、田代俊孝は人生観や死という視点から、「善悪の価値観を離れ、絶対無限に乗托することである。痛いときは痛いと言ひ、苦しいときは苦しいと言ひ、どんな死に方をしてもしようなくことのできる立場である。」⁽³⁾ ととらえている。この立場を踏まえると、自然法爾の死の受容とは、人生を長短といった価値観で判断せず、ありのままの死を受容すること、と解釈することができ、調査対象者Aや対象者Bの発言は、あるがままの死を受容している点で自然法爾の死の受容に適っていると考えられる。しかし、対象者Bは苦からの逃避として死を受容し、また、死を受容しているとしながらも助けてほしいとしており、対象者Aの発言内容と異なる。

真宗における死生観の検討（河村）

二 再会

対象者Aは、浄土があり、亡き人とは浄土において再び出会える、ということを発言していた。その考え方が死別の悲歎軽減につながったと考えられる。

親鸞は、有阿弥陀仏への返書である『末灯鈔』第十二通で、この身は、いまは、ときはまりてさふらへば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまいらせさふらふべし。（『定本親鸞聖人全集三』八八頁）

と述べ、親鸞が先に往生しても浄土において必ず有阿弥陀仏と出会うということを示している。また、『拾遺真蹟御消息』第二通においても同様に、先日亡くなった覚念坊は先年亡くなった覚信坊と浄土で必ず出合っている、ということと、書簡を送った相手の入道に対し、先立つであろう親鸞が浄土で待っているということを示している。すなわち、親鸞は自身をはじめ、信心を得た人たちは亡くなっても浄土で再会することができると考えていたことが示されている。

ところで、『末灯鈔』第十二通では行信不離が示されているが、その後に、「詮ずるところ、名号をとなふといふとも、他力本願を信ぜざらんは辺地にむまるべし。本願他力をふかく信ぜんとがらは、なにごとにかは辺地の往生にて候べき。」（『定本親鸞聖人全集三』八八頁）とあることから、仲野良

俊は、親鸞は最後には信心を要していると解釈している。⁽⁴⁾ また、『拾遺真蹟御消息』第二通では、「かくねんばうのおほせられて候うよう、すこしも愚老にかはらずおはしまし候へば、（中略）入道殿の御ころも、すこしもかわらせ給はず候へば」（『定本親鸞聖人全集三』二三頁）とあることから、覚信坊、覚念坊、入道が親鸞と同じ信心であることを重要視している。従って、親鸞が浄土で再会できると考える背景として信心の重要性が考えられる。その信心は『末灯鈔』第十二通にあるように、本願他力に対する信心である。本願他力とは、「弥陀の本願とまふすは、名号をとなへんものをば極楽へむかへんとちかはせたまひたる」（『定本親鸞聖人全集三』八八頁）とあることより、名号を称える者は浄土に往生するという願である。ここは行信を問題としているため、信に焦点を当てるならば、浄土に往生する、の部分が重要であると考えられる。親鸞は『大無量寿経』の第十八願の成就文を依り処として、信心を得たその時に、すなわち現生において正定聚に住すると解釈している。正定聚に関して、『大無量寿経』の第十一願から、正定聚に住すれば必ず真実報土、すなわち浄土に往生すると解釈している。つまり、弥陀は、現生のうちに浄土に往生することを誓っていて、そのことを親鸞は信じているから、亡き人たちが往生していると確信しているのである。

この考え方は対象者Aと重なる。従って、対象者Aのような死生観を良しとしている人に対しては、このような親鸞の思想を示すことが、真宗の関わり方の一つとして考えられる。

三 慙愧

対象者Bは、故人に対してもつと何かできたという自責の念を示していた。これについて、慙愧の視点から検討する。

慙愧とは、「信巻」で『涅槃經』から阿闍世の物語を引用している部分に、自分からすすんで罪を作らないこと、内心に自らの罪を恥じること、人に対して恥じること（慙）と、人に罪を作らせないように教えること、人に自らの恥を告白すること、天に対して恥じること（愧）であると示されている。従って、対象者Bの自責の念は、後悔による罪の意識の視点から慙愧としてとらえることができると考えられる。

ところで、ここでの耆婆の発言は、阿闍世の罪の告白に対してなされたもので、その告白の内容は五逆罪を犯したことで、それにより地獄に堕ちるといふ恐怖である。つまり、慙愧の内容をみると、対象者Bは自責の念であるのに対し、阿闍世は地獄に堕ちる恐怖である。しかし、定方晟は、

現代人の苦悩は、たとえ地獄がなくても、現にたえずかれらを襲う罪の意識である。この意味の恐れが阿闍世にあったろうか。それは間違いなくあったと思われる。なぜなら、かれの問いに対す

るブツダの答えは、明らかに罪の意識の解決を主要テーマとして
いるからである。

と述べているように、⁽⁵⁾ 釈尊の答えが罪の意識に焦点を当てていることから、阿闍世の慙愧は現代人と同じようにたえず襲う罪の意識であるとしている。この視点からみれば、対象者Bと阿闍世の慙愧は質的に同じととらえることができる。

阿闍世の慙愧に対し、耆婆は、罪を犯してしまったが、それに対して慙愧の念が生じることが人として大事であると発言している。つまり、慙愧の念を持ったとしても、それこそが人間として大事であり、その慙愧を否定するものではないことが示されている。しかし、鍋島直樹が、「親鸞は、「慙愧すれば滅罪する」という『涅槃經』の文を信巻にほとんど引用していない。慙愧は滅罪を目的とした行為でもなければ、救われるための条件ではない。滅罪という見返りを求めて、慙愧するのでは決していないのである。」と指摘しているように、⁽⁶⁾ 滅罪を目的とする慙愧は罪の救いとはならず、あくまで自然に生じる慙愧が重要であり、慙愧したとしても、それは人間として当然である、と慙愧の受容が示されているのである。

この後、釈尊は阿闍世に説法を行うが、慙愧の視点から、

大王、たとえば涅槃は非有・非無にしてまたこれ有なるがごとし。殺もまたかくのごとし。非有・非無にしてまたこれ有なりといえども、慙愧の人はすなわちすなわち非有とす。無慙愧の人はすな

真宗における死生観の検討（河村）

わち非無とす。〔『定本親鸞聖人全集一』一七三頁〕

の部分に着目する。この有、非有、非無の対象に関しての解釈は様々だが、本稿では慙愧の視点から心に焦点を当てているため、鍋島直樹の、「心の底から罪を詫びて慙愧している人には、もはや殺害の心は存在しない（非有）。しかし、自分が殺害を犯していながら、その罪をまったく認めず、他人のせいになっている人は、殺害の心が依然としてあり（非無）、罪の果報もこの人こそが受けるのである。」という解釈に従い、対象を殺害の心とする。さらにいえば、先に述べたように現代人の視点にまで広げると罪の意識が対象となる。すなわち、罪に対して事実と異なる見方をするることによって罪の心は生じるのである。阿闍世は事実を見つめて慙愧の念を抱き、罪の心を自覚し、月愛三昧によって如来に攝取されて救われていったのである。

従って、真宗において、死別を通して故人に対する自責の念を持つ人に対する関わり方の一つの指針として、その自責の念を否定せず受け入れ、そこから罪の心に縛られないことを説くことが考えられる。そしてそこから、鍋島直樹が、「罪を引き受けつつ、過去のすべてに縛られず、悪の心から自由になる未来を切り開いてほしい。そのことをブッダは伝えたかったのである。」と示したように、⁽⁸⁾罪の心に縛られずに前に進むことを勧めることが重要であると考えられる。

四 おわりに

以上のように、在宅高齢者の死生観を踏まえて検討した真宗における関わり方は、対象者の死生観に沿った、真宗の立場からのスピリチュアルケアの一つとして考えられる。

- 1 竹田恵子・太湯好子「日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討」、『川崎医療福祉学会誌』一六号、二〇〇六、五三—六六頁。
- 2 信楽峻磨「仏教におけるホスピス・ケアの問題——とくに浄土教における看死の思想をめぐって——」、『援助的人間関係』一九八八、一五七—一九三頁。
- 3 田代俊孝『仏教とビハラー運動』、法蔵館、一九九九。
- 4 仲野良俊『末灯鈔に聞く』、真宗大谷派名古屋別院、一九八〇。
- 5 定方晟「阿闍世の救い——仏教における罪と救済——」、人文書院、一九八四。
- 6 鍋島直樹「阿闍世の救いの過程」、『真宗研究』五一号、二〇〇七、九三—一一七頁。
- 7 鍋島直樹「阿闍世の救いの過程」、『真宗研究』五一号、二〇〇七、九三—一一七頁。
- 8 鍋島直樹「アジャセ王の救いの物語——月愛の意義——」、『心の病と宗教性——深い傾聴——』、法蔵館、二〇〇八、二四四—二六三頁。

〈キーワード〉 真宗、死生観、死別、慙愧

（同朋大学大学院）